

訪問看護ステーション

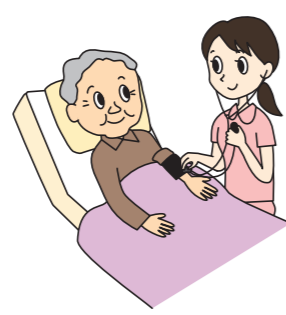
訪問看護サービスの内容

訪問看護は介護保険・医療保険が利用できます

床ずれなどの予防・手当て



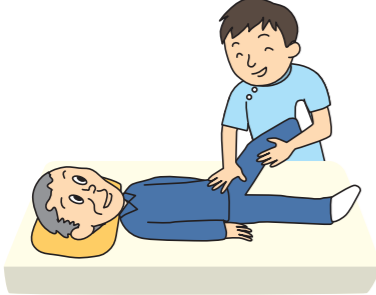
健康チェックや医療の相談



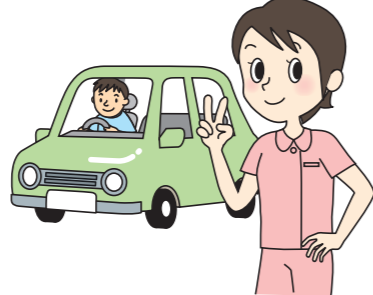
薬の管理や痛みの管理
医療処置と医療機器の管理



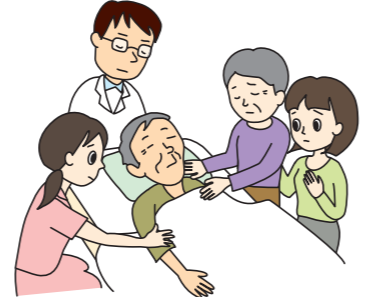
お家でのリハビリテーション



緊急時の対応



お家で最期を迎えるための
お手伝い



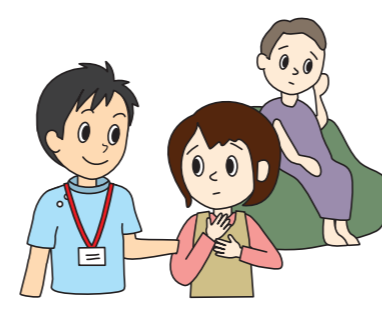
日常生活のお世話の指導



ご家族等への
介護支援・相談
医師や地域との連携



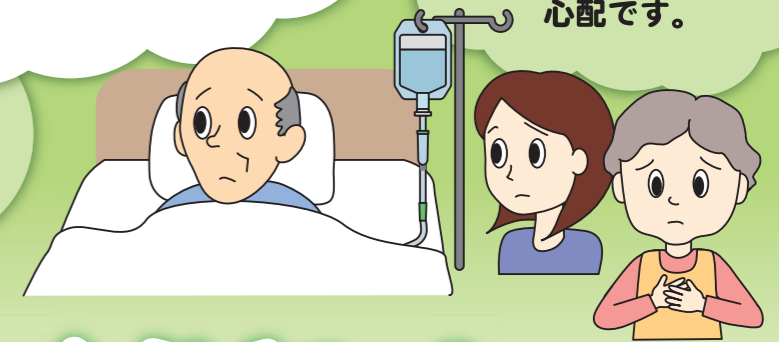
認知症の看護や心のケア



お家での療養生活で
不安なこと、困り事などは
ありませんか？

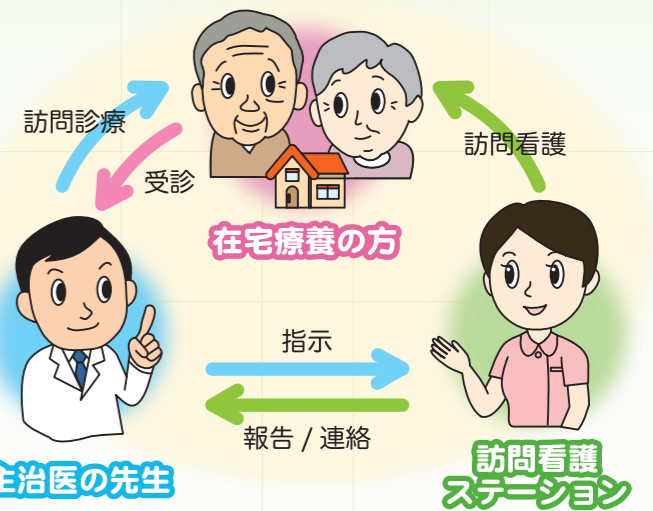
私に
介護ができるか
心配です。

病院から退院するように
言われています。
点滴などの医療行為があるのですが、
家で生活できるか不安です。



ご安心ください！

訪問看護師が
あなたのお家を
訪ねます。



今 お家で療養し、お家で最期を迎える方が増えてきています。
その療養生活を応援しているのが、訪問看護ステーションの訪問看護師です。

医療行為だけではなく、身体のケアはもちろん、こころのケアも。

「やはり、最期は住み慣れた家で過ごしたい」「もう一度口から食べられるようになりたい」など…

療養生活の支援をお手伝いするために、訪問看護師は乳幼児から高齢者まで

すべてのご利用者のご家族に寄り添います。

まずは、お気軽にご相談ください。

「あなたらしく」を大切にしたい生活をおくる。そのために訪問看護師がいるのです。

お問合せは

- 訪問看護ステーションや主治医、市町の地域包括支援センターなどをお願いします。
- 介護保険による介護認定を受けている方はケアマネジャーにご相談下さい。
- 入院中の方は看護師などにご相談下さい。

公益社団法人 滋賀県看護協会 訪問看護支援センター

〒525-0032 滋賀県草津市大路二丁目11番51号

TEL 077-564-6468 FAX 077-562-8998

訪問看護師はあなたと病院・地域をつなぐかけ橋です



「訪問看護のことがよく分からない。」と

思われている方のために、

訪問看護のエピソードを集めてみました。

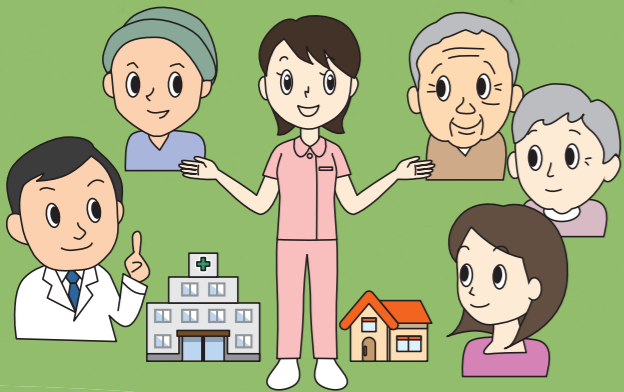
そこからうかがえるのは、

信頼、安心、連携という言葉に

こめられた訪問看護師の想い。

ご利用者のご家族に

訪問看護師は、いつも寄り添っています。



ご家族の声

がん末期の状態、在宅での療養をするため、退院され、ご自宅でも期を迎えられたご利用者のご家族の声を紹介します。

「自宅での生活が不安でしたが、看護師さんが一緒に考えてくれて、自分が今なにをしたら良いかの確にアドバイスをいただき、母娘の時間をゆっくりすごせました。」

「看護師さんに体調にあわせて、お風呂に入れていただいたり、体をふいてもらったり、足を洗ってもらったり、ぎりぎりまで本人が楽に過ごせるようにしてもらいました。」

「診察の時、先生に伝えられるか不安な時、看護師さんからの薬や体調をまとめたノートで伝えることができました。」

お食事ができるように回復されました

Aさんは、脳梗塞後遺症により飲み込む機能が低くなっている、誤嚥性肺炎(ごえんせいはいえん)を起こすために胃に直接栄養剤を入れる状態(胃ろう)で退院されました。退院直後、ご本人は活気がなく、ご家族も不安が隠せない状態でした。

最初は胃ろうの管理や清潔な状態を保つためのケアを行う目的で看護師が訪問しました。ご家族と一緒に、ひとつひとつAさんの状態を確認しながらケアを行うことで、ご本人もご家族も安心感と自信を持っていただくことができました。

次第に「食べたい」という意欲が出てきたので、口腔ケアや嚥下訓練も行なうようにしました。少しずつ口から食事ができるようになり、最終的にはしっかりと口から食べて栄養を十分にとることができ、胃ろうからの栄養剤の注入は終了となりました。

すると今度は、「外を散歩したい」という希望が出てきましたので、看護師の訪問に加えて、理学療法士によるリハビリテーションを追加しました。今は、同伴すれば家の周囲を散歩できるまでに回復されました。

ご本人の病状や状態に応じて、また、ご本人の意欲や希望を叶えるために細やかな訪問看護での対応。そして、連携を図りながら専門の療法士が行うリハビリテーションによる生活状態の改善。訪問看護は、その人ひとりひとりにペースに合わせることが大切であり、生活の場に寄り添うことができる仕事であると感じています。

自費でのサービスですが・・・「結婚式に出席したい」という希望を叶える

母親のかわりに育てた孫の晴れ姿を見たいと、がんのつらい治療に耐え在宅生活を送られていたBさん。

式の数週間前に悪化し、入院となりましたが、ご本人の結婚式への出席の意思は固く、長男さんから訪問看護師に会場への同行の依頼がありました。

主治医とも緊急対応の確認をし、ご本人の思いに応えるため保険外サービス(※1)で自費になりますが式場に同行しました。

Bさんは、疲れた様子もみせず無事式に出席されました。

その後、1週間程でお亡くなりになりましたが、その時、お孫さんととられた写真の中の笑顔は最高でした。

(※1 結婚式場に行くことは、訪問看護の対象とならない支援でしたので、保険外としてご家族の負担でご利用いただきました)

穏やかな看取りへのケア

「家族の死」や「看取り」を意識しないまま、医師から最期が近いことを告げられ、不安でいっぱいになっておられるご家族がおられました。

ケアマネジャーから依頼があり、状況をお聞きする中で、ご家族が十分に納得して「家族の死」を受け入れられるように、また「納得した看取り」ができるように看護していくことが必要であると考え、訪問させて頂く事になりました。

ご家族が納得したお別れができるように、ケアや処置はできるだけご家族と一緒に、ご家族やご本人が希望される最期を迎えられるようにと看護を行いました。

訪問看護ステーションで作成している看取りのパンフレットをご家族と一緒に確認し、現在の状態の把握をしていきました。

これらの関わりからご家族は徐々に落ち着かれ、「(家で)看取る事ができそうです。ゆっくりおばあちゃんと過ごすことができました。本当に良かったです。」とおっしゃっていました。

看取りの場面では、仕事でその場に來られないご家族は電話で、その場に居るご家族はご本人を囲み、最期の瞬間を共有されていました。

看取りまでの訪問期間は1週間と短かったのですが、四十九日が過ぎてから訪問すると、「訪問看護さんに来てもらって本当に良かった。あのままだったらどうなってたやろ。あんなに穏やかにお見送りができなかったと思う。」とおっしゃっていただきました。

介護拒否の強い認知症の方への関わり

もともと来客を好まず、ここ1年程は入浴も不十分なままで外出も殆どできていないという生活をされていたCさんは、訪問のたびに「頼んでもないし来てもらわなくてもええ」と断られ続けていました。しかし、週2回の訪問を続け、タッチング(肩のマッサージ)をしながら、女学校時代のお話等の昔のことをうかがったり、世間話に織り交ぜて食事や睡眠の様子を、ゆっくり聞くようにしたところ、3ヶ月目頃から、看護師との信頼関係が築けるようになりました。

ご家族とも、日常生活リズムの整え方などをお話する中で、ご本人への接し方にも余裕が生まれました。ご家族とも相談してデイサービスにも通う事になり、今では外出が可能になりました。

様々な年齢や病気の方への訪問看護

訪問看護は、お年寄りだけではなく、お子さんやさまざまな病気を持って自宅で暮らしておられる方が対象です。

小児脳腫瘍のDちゃん

ご家族に囲まれてお家で過ごされ、余命宣告よりも長い時間を在宅で過ごすことができました。

最期、在宅か病院か迷われましたが、訪問看護の回数を増やし、主治医との連絡も密にとる中で姉や弟などの多くの方に見守られながら、安らかな看取りとなりました。

精神的な病気でご気分が不安定なEさん

Eさんへの訪問を開始した当初は、不安が大きく頻りに相談の電話があり、時として自殺しようとするような言動もみられました。

しかし、訪問看護で常にEさんの思いを受け止め、出ていくことについてはそれを認め、継続するように「できるよ」「大丈夫 それでいいよ」と受容的態度(肯定的に後ろから後押し)で関わり、支持的な支援を行うと共に、正しく病状を評価・確認し、服薬や睡眠の状態を確認して、必要に応じて主治医とも連携しながら訪問を継続することにより、次第に落ち着かれ、内職を出来るまでになりました。

訪問開始当初はひっきりなしの電話でしたが、今までは定期訪問以外に電話相談は殆どない状況で落ち着いて過ごされています。

ご家族を含めて訪問看護

交通事故によって重度のこん睡状態となられた息子さんの介護をしなくてはいけなくなったご両親は、共に高齢で突然の介護に不安一杯になっておられました。

このご家族に、介護の指導を丁寧に行い、困るたびにかかってくる電話での相談に応じることで、ご両親も徐々に介護生活に慣れる事ができ、相談の電話もかからなくなりました。訪問看護を開始して10年が経過しました。

最近は介護されるご両親にも徐々に認知症の症状が出はじまりましたが、訪問時にご両親の様子を観察する事もでき、ご利用者さんだけでなくご家族全体を支援する事ができています。